

2017年12月17日 礼拝メッセージ

聖書：マタイの福音書2章1～12節

説教：キリストはどこで生まれるのか

待降節（アドベント）の由来

クリスマスの季節を迎え、今日からアドベントの第三週目に入りました。なぜ教会では、このように主の御降誕を待ち望むアドベントの期間を過ごすのか。初めて教会に来られた方には不思議に思われるでしょう。その事情は、イスラエルがたどった歴史と深く関わっております。

事の発端は、神がアブラハムに、カナン之地をあなたの子孫に永遠に与えてくださると約束してくださったところから始まります。イスラエル人はそれ以来、自分たちはアブラハムの子孫であると自覚し、カナン之地、イスラエルは神の約束の地であると信じて疑いません。ところが時代が下って三代目の王であったソロモンが亡くあたりから、イスラエルは坂道を転げるようにして力を失い、あっという間にアッシリヤやバビロニアの手で滅ぼされ、自分たちの国を失ってしまいます。神がアブラハムに語ってくださった約束は破られたのか。そうではありません。神を神とせず、罪を悔い改めることもなく、曲がったことが白昼堂々と行われている。そのような人の罪が招いた結果でした。

しかし神は救いの道を備えます。さまざまな預言者を遣わし、神はやがて救い主を送るから、希望を失ってはならないと励まし続けます。それを聞き、人々は救い主の到来を待ち続ける。そうし神は約束のとおり、救い主イエス・キリストをいまから二千年前に送ってくださった。私たちが今、このようにアドベントを過ごすのは、かつて旧約の信仰

者たちが救い主を待ち続けたことに由来します。

救い主が来られたということを聞かされたとき、人々はどのような反応をしたのか。今日の箇所から見て参ります。

1 東方の博士たち

1) その方の星を見た

1節に「東方の博士たちがエルサレムにやって来た」とあります。東方の博士たちとはだれのことか。詳しいことは分かりませんが、2節を読むといくつかのことがわかります。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」

彼らは異邦人ですから、聖書のことはほとんど知りません。わからないのでわざわざエルサレムにやって来て聞こうとしたわけです。彼らが訪ねてきた理由については、「星を見たから」と説明しています。おそらく博士たちは、占星術の専門家だったのでしょう。権力者たちは、いつの時代もそうですが、敵がいつ攻めてくるのか、来年は豊作か飢饉、常に先のことを知りたい。その手段として、二千年前の中東では権力者は占星術を使ったと言われています。そんな博士たちは、あるとき、見たこともない不思議な星が光っているのを発見し、占星術の知識から、ユダヤ人の王が生まれたとわかったようです。

自分の国の王になる者が生まれたのでは

ない。外国の王の話です。直接には関係ありません。ところが博士たちには、関係ないで済まされなかった。これは大変なことだ。この星は、私たちのいのちを罪から救い出す、その方の誕生を示している。是非その方にお会いし、ユダヤ人の王として生まれた方を拝みたい。そして、贈り物を直接届けたい。そうするためには、旅に出なければなりません。目的地が分からない旅です。砂漠地帯や荒地を越えていく長い旅です。決して安全な旅ではない。いのちがけの旅です。それでも幼子に会って拝みたいと願って出発しました。

2) 「拝みにまいりました」

具体的な目的地はわからないとしても、とにかくエルサレムに行けば何か分かるかも知れない。そのようにして博士たちは西に向かい、エルサレムに着いたとき叫びました。2 節。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」

2 ヘロデ

1) 恐れ惑う

これを聞いて、ヘロデ王とエルサレムの人たちが恐れ惑ったとあります。聖書も知らない異邦人たちがどうして救い主の誕生を知ることができるのか。今で言う、フェイク・ニュースだ。それで人々は博士たちの発言を無視したのかもしれない。

でもヘロデ王の場合は無視できない事情があります。自分は今ユダヤ人の王の座に就いています。それが今将来ユダヤ人の王となるものが生まれたということは何を意味するか。将来その子どもが大きくなったとき、

自分の地位が危うくする可能性があるということ。嘘の情報かも知れないけれど、可能性があるならば敏感に反応します。

2) キリストはどこで生まれるのか

ヘロデはすぐに学者たちを集め、キリストはどこで生まれるのか調べさせます。皆さんの聖書には4 節の「キリスト」というところに米印があり、欄外の説明には「すなわちメシヤ」とあります。

旧約聖書を開くと、イスラエルの王となる者に、祭司が油を注ぐ場面が出て来ます。「油注がれた者」のことがメシヤですから、メシヤと言えばイスラエルの王を指します。後に、メシヤは救い主を指すことばにも使われるようになっていきます。私たちは救い主をイエス・キリストと呼んでいますが、言い換えれば「油注がれた方、救い主イエス」ということになります。

でもヘロデは違います。「キリスト」と言っていますが、「救い主」のことではなく、「イスラエルの王」の意味で使っている。あくまでも自分の利害があるかないかでこう呼んでいるだけです。

3) 計略

ヘロデから問いただされた学者たちは、旧約聖書ミカ書5 章2 節のみことばを開き、キリストが生まれるのは「ユダヤのベツレヘムである」と答えます。旧約聖書は、はっきりと救い主キリストのことを指し示していたのです。

この報告を受けたヘロデはすぐに東方の博士たちを呼び、ベツレヘムに向かうように命令します。居場所が分かったら知らせてもらいたい。自分も行って拝むから。まことに

信仰深い態度に見えますが、もちろん本心ではない。博士たちを泳がせて、幼子の居場所を突き止めてから幼子を葬ろうという魂胆です。でも博士たちはヘロデの計略のことなど気がついていませんから、素直に「はいわかりました。後で連絡します」と約束してベツレヘムに向かいます。

4) 惨劇

博士たちは幼子を捜し当て、礼拝した後、夢の中でヘロデの計略を知らされ、ヘロデの所には寄らずに遠回りして帰国します。それで幼子イエスはヘロデに居場所を知られずに済みます。そこまでは順調です。問題はその後です。怒ったヘロデは、ベツレヘム近辺に生まれた二歳以下の男の子を全員殺してしまう。幼子イエスは無事にエジプトに逃れたのですが、なにも関係のない子どもたちが巻き込まれ、殺されていくという惨劇が起きてしまいました。

3 幼子イエス

1) 神は無力なのか

いったいなぜこんなことが起きるのでしょうか。ある方は考えるでしょう。東方の博士たちがエルサレムの街中で叫んだことば。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。」このことばがどんなにヘロデの心を刺激するのを神は知らなかったのか。

またある方は言うでしょう。「いや、そもそも不思議な星が輝くということがなければ博士たちは来なかったはずだ。ヘロデがこんな事件を起こすことを神は知らなかったのか。」

またある方は言う。「旧約聖書の中に、ベ

ツレヘムという町の名前を書くべきではなかった。どうして神は町の名前を書かせたのか。」

2) 旧約の預言の通りにお生まれになる

神は無力なのか。配慮がないのか。もし本当に無力であるというならば、救い主を示す星が出現するはずはないでしょう。博士たちはイエスがお生まれになった家を知らなかったのに、どうしてそこに行けたのか。神は無力なのだから、これは単なる偶然だと言うことでしょうか。

神は預言者ミカを通してこう語りました。「ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。わたしの民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るからだ。」ミカがこれを語ったのはイエスがお生まれになる七百年前です。そんな大昔に約束したことを語ったとおりに実現していく。これも偶然でしょうか。もしそうなら聖書を読む意味はなくなります。

3) 産婦が子を産むように (ミカ書 5 章 3 節)

決して偶然ではない。神が無力なのでもない。神はあらゆるものを支配しています。それなのにどうしてベツレヘム周辺の二歳以下の男の子が殺されたのでしょうか。今もそうです。世界ではクリスマスをお祝いしている一方で、今日食べる物がいない人たちがいます。寝る所のない人たちがいます。学校に行きたくても行けない子どもたちがいる。テロや戦争で家族が殺される人たちがいます。暴力に怯えている人たちがいます。家族の安否も分からないまま行方不明になっている人たちもいる。不正がはびこっています。軍事力で

相手を脅かし、支配しようとする人たちがいます。いったい神は何をしているのか。神がいるならばなぜこのような不正を止めようとしないのか。そんな疑問を投げかけられます。

今日の箇所に戻りましょう。子どもたちが殺されてしまうのは、無力な神のせいなのでしょう。それとも、神の計画だけが大事で、人のいのちなど何とも思っていないのか。いいえ。もし人のいのちのことなど気にしていないというのなら、そもそも救い主が私たちのところへ来る理由はありません。ロデの罪がこのような残酷な事件を引き起こしています。では神は、ヘロデの罪の前では何もできないということなのか。いいえ。神がヘロデの罪の前で無力になっているのではない。ヘロデの罪をとおして私たちと苦しみをもにしようとされている。そのように言うことができます。

理解できない。苦しみをもにする前に、苦しんでいる人を助けるべきだと言おうでしょう。子どもが殺されないようにすべきだと言おうでしょう。そうかもしれません。でも、神はそうしません。

そのことをミカは語っていました。ミカ書5章3節。「それゆえ、産婦が子を産むときまで、彼らはそのままにしておかれる。彼の兄弟のほかの者は イスラエルの子らのもとに帰るようになる。」

産婦が子を産むときまでおよそ十ヶ月間過ごします。産まれることは分かっています。でも今すぐ産まれるわけではない。定められた期間を過ぎさなければならない。救い主が来られるのは、ちょうどそれと同じ。その間、苦しみのときを過ぎさなければならない。私たちの目には遅いと見えるかも知れません。

神は何もしていないと思いかも知れません。しかし主は私たちと苦しみをもにされています。

ときが来れば産婦が必ず子を産むように、主は来られる。その救い主を信じて待ち望みます。